206250
大9. 6. 28

哲學研究 第二十二號 第三卷 第一冊

京都哲學會寄贈本

意識とは何を意味するか

西田幾多郎

我々は自ら或物とか或事柄とかが自分に意識せられて居るとか居つたとかいふことを知つて居る、從つて此等の物と意識せられなかつた物とを區別する。物が意識せられるとは如何なることを意味するのであらうか。

物が我々に意識せられると否とは物自身に何等の變化もないと考へることができる。例へば、數理とか物理現象とかいふものが我々に意識せられると否とは數理とか物理現象とかいふものに何の關係もない。啻に此等の對象が意識作用と關係のないのみならず、意識現象の性質として考へられて居る赤とか青とかいふものも表象自體として意識作用を超越して居ると考へることができる。赤とか青とかい

ふものも意識せられることに依つてその性質を變しない、意識作用は表象自體に何物をも附加せないのである。

普通には色とか音とかいふものは精神現象の性質であると考へられて居る。エーテルの波動が眼底を刺激じて色と感じ、空氣の振動が內耳に入つて音と感ぜられる。色とか音とかいふものは外界刺戟が感官に觸れて生理的刺戟を起し、此刺戟が腦中樞に傳はり、之に伴ふて起る精神現象の性質と考へられる。精神と物體との間に因果的關係を考へ、甲の物體の作用によつて乙の物體に變化を生ずる如く、種々の感覺的性質は外界刺戟の作用によつて起されたる意識現象の性質に過ぎぬと考へられるのである。赤とか青とかいふのは意識現象其物の性質であつて此等の性質を離れて意識現象なるものはない。赤の感覺とか青の感覺とかいふ外に意識といふものがあるのではない。此等の具體的意識現象以外に意識の性質とか意識作用とかいふものを考へるのは物體現象の背後に物力を考へると同じく、抽象的思惟の作用に過ぎないと考へることもできる。

青の感覺、赤の感覺、空間知覺、時間知覺、其他種々なる個々の意識現象を離れて意識といふものはない。恰も電磁氣の現象を離れて電磁氣がないと一般であると考へ

られる。併し此等の語は嚴密に考へて見なければならぬ。我々は赤とか青とかいふものを感ずることもできれば、之を記憶表象として想起することもできる、又之を思惟對象として考へることもできるのである。之を以て見ると赤とか青とかいふのが直に赤の感覺、青の感覺ではない。赤の感覺には赤の外に何物かが加はらねばならぬ、卽ち意識の對象と作用とを區別することができる。赤の感覺作用とか知覺作用とかいふのが赤ではない、寧ろ知覺せられるもの想起せられるものが赤いのである、赤といふのは意識對象の性質であつて、意識作用の性質ではないと云つてよい。無論斯く意識の對象と作用とを分つて考へるのは思惟の作用に過ぎぬ、具體的意識現象には此の如き區別はないとも云ひ得るであらう、意識現象は物理現象と同じく具體的出來事と考へられる。併し今赤の經驗が青の經驗に變じたとする、我々は之を赤の感覺が青の感覺に變じたと解するともできれば、外界に於て赤の光が青の光に變じたと解するともできる。之を感覺の變化と考へるのは直接經驗の事實として誤なきものと考へられるが、之を外界に於ける物理現象の變化に基くと考へるのは推論であつて、時に誤ることがあるかも知れない。例へば水中にさした杖が光線の屈折により折れて見える如き場合があるかも知れない。併し物理現象とは所謂

客觀的立場から我々の經驗を統一したものとはいへ、我々の感覺的經驗を離れて物理現象があるのではない、物理現象とは感覺的經驗の變化の一種の解釋である。物理現象は我々が之を經驗すると否とに關せずそれ自身にて存在し、眼のできない前から光のエネルギーが存在したと云ひ得るであらうが、此の如きは單に經驗の可能といふことを意味するに外ならない、是以上は說明のために設けられた假定である。飜つて所謂心理現象なるものを考へて見て、それが果して心理學者の考へられる如く直接經驗の事實その儘で何等思惟の加工をも混ぜないと云ひ得るであらうか。赤の感覺が青の感覺に變じた場合、我々は之を意識內の現象として之に就て十全なる知識を有する直接經驗の事實と考へて居るが、外に對して立てられた內は所謂外と同じである、所謂我は物と同じく外界的ある。固より現今の心理學者は我といふ如き實在を考へないであらう、一々の精神現象を其時々々の出來事と考へて居る。併し若し此考を徹底的にするならば、精神現象の再起といふとは全然不可能とならねばならぬ。記憶とか意識統一とかいふことは如何にして說明するであらうか、赤の感覺が青の感覺に變つたといふ意識は如何にして可能なるか。嚴密なる意味にて一度限りの出來事は何等の實在性をも帶びるとはできぬ、その間に何等の結合を

も考へるとはできぬ、心理學的法則を考へるのも無意義となるであらう。

赤の感覺が青の感覺に變じたといふ場合、之を單に一度限りの出來事の連續と見るならば、心理的實在とは如何なるものであらうか。出來事とは何物かの上に於ての出來事でなければならぬ、何物かがその基礎とならねばならぬ。現象の背後に所謂實體の如きものを考へる必要はないとしても、此等の現象が何等かの意味に於て獨立し、それ自身の法則を有するならば、單なる出來事の連續以上のものでなければならぬ。物理學に於ても種々の現象を出來事と考へるのであるが、其背後に種々の力とかエネルギーとかを考へることに依つて、物理的實在が成立するのである。苟も客觀的實在として我々の認識對象となるものは、自然科學的實在の如く現象間の不變的關係といふ如きものか、歴史的實在の如く種々の現象を個性的に統一する如きものかでなければならぬ。若し個々の要素を實在と考へるとしても、物理學者の所謂原子の如きものかヘルバルトのレヤーレンの如きものを考へねばならぬ。ヴントに依れば現今の實驗心理學は主意說であつて、個々の精神現象を出來事と見做し、物理現象と同じく實驗法を用ゐて之を研究すると云ふが、それにしても現象と現象とを關係せしめるものがなければならぬ、此等の現象を統一する根本概念がなけ

ればならぬ。物理現象に於ては空間、時間、運動といふものが此等の根本概念となるのである、空間的延長といふものが物理現象の根本的性質となるのである。心理現象を考へるにも、何等かの意味に於て此の如き根本概念がなければならぬ。然らざれば心理現象の關係といふものを考へることは不可能である、他と區別して心理現象なるものを纏めて考へることもできないであらう。

意識は誰かの意識である、或人に意識せられるといふことが意識現象の特徴と考へられる、これが意識現象の我々に直接と考へられる所以である。併しこの或人といふのは何を意味するか。現今の心理學では、現象の背後に我といふ如き實在を考へない、自己同一の意識は統覺作用に伴ふ一種の感情と考へられて居る。此感情が不變なるが故に自己も不變と考へられる、此感情が失はるれば二重人格の如き現象を呈するのである。右の如く考へるならば、我といふのは所謂意識現象の結合點であつて、或人に意識せられるといふことは或一點に結合せられるといふこととなる、意識現象は或人に意識せられるいふことは一つに統一せられて居るといふこととなる。併し此の如き統一といふ語の意味は嚴密にせなければならぬ、意識現象は如何なる意味に於て統一であるか、意識統一とは何を意味するか。意識現象の統一と

は物體の原子の如き實質的一者であるとは今日何人も考へないであらう、併し單に意識現象が相互に關係するといふに過ぎぬならば、物理現象も互に相關係するのである、一つの現象が他の現象に影響を及ぼす所に物理的法則が成立するのである。意識統一とは單なる相互作用以上のものでなければならぬ。精神現象に於ては關係其物が實在的であるのである、これ精神現象は多にして一、一にして多であると云はれる所以である。

物體現象は空間時間の上に於て相働くのであるが空間時間は物體現象にあらざるとはいふまでもない。嘗て考へられた如く物質はエーテルといふ連續體の渦動であると考へれば、物體現象の背後に於ても一つの連續體が實在と考へることもできる。併し此の如き統一は實質的統一である、一原子の統一と同性質である。精神現象に於ては、之に反し、構成的要素の實在性と共に、全體の實在性が保たれ得ると考へられる。例へばジェームスの樣に我々が或一文章を順序的に意識する時、その一語一語の意識に於て全體の意味が含まれて居ると考へることができる。又ヴントなども意識現象の上に新なる綜合的意識現象が成立するも要素的意識現象は尙その實在性を維持すると考へて居る。氏が心理的因果律を自然科學的因果律と區別

して、創造的綜合となすのは之に由るのである。如何にして精神現象に於ては綜合的全體が構成的要素に對して實在性を維持することが出來るか。綜合者が被綜合的要素と同列の實在としては自己の實在性を維持すると共に、他に對して綜合的位置を取ると考へることはできぬ。例へば前に云つたジェームスの考にしても、文章自體 Satz an sich ともいふべき意味の意識は一語一語の意識に比して一層高次的と考へられねばならぬ。ジェームスは根本的經驗論の立場からは to とか from とかいふ如き關係語によつて表される意識も經驗であると云ふが、單に意識されると云へば同樣の樣に思はれるかも知らぬが、その意識內容の異なる如く、意識されるといふことの意味が異ならねばならぬ、ブレンターノ學派の所謂作用に於て異ならねばならぬ。ヴントの考にしても氏の所謂精神的要素と表象と、又は表象と聯想、統覺などとはその次位を異にしたものでなければならぬ。右の如く考へ得るならば、意識現象に於て全體が部分に對して有する實在性は高次的のものであるといふことができる、卽ち意識に於ては一層高次的なるものが實在となるといふことができるのである。無論多くの心理學者は此意識を單に强度に於て弱きものと考へるであらう、自覺されない一種の意識と考へるであらう。併し單に强度に於て弱いといふこと

は他に對して綜合的地位を取るといふ理由にはならぬ、單に弱き感覺と見るの外はなからう。無意識的意識といふのは單に强度の弱いものではなくして性質的に異なつた意識でなければならぬ。一般の心理學者に承認せられないのであるが、余は所謂ヴルツブルク學派の說の如く、意味の意識は決して不明瞭なる意識ではないと思ふ。無論一般の心理學に於ても、無意識的意識がそれだけとして綜合的地位を取るといふのではなく、無數なる過去の經驗內容を代表するものと考へるのであらうが、如何にして斯く一つの要素が無數なる他の經驗內容を代表することができるか。若し之を聯想の法則に依るといふならば表象と表象とを結合するメディヤムとなる者は何であるか。普通に考へられる如く之を腦細胞の作用に歸するならば精神現象に於ては自然現象と異なつた統一が實在であると云はれなくなる。之を表象其物の力に歸するならば、ヘルバルトの表象機制說 Vorstellungsmechanismus の如きものとならねばならぬ。併しヘルバルトの考へた樣に表象がそれ自身の力を有し互に相制 hemmen すると考へるならば、此の如き表象力といふのは如何なる意味に於て物力よりも一層我々に直接的と考へ得るであらうか。物力と表象力とは力の性質を異にするとしても、共に我々の經驗內容を對象界に投射して、相互關係を統一する

爲、その背後に考へられた一種のミィーディヤムに過ぎないではなからうか。對象界に投射して考へられた所謂無意識は其實在性に於ては物力と同一である。總て量別的關係は性質的なる者に對して外界的でなければならぬ、量別的關係によつて內界經驗を說明しやうとするのは旣に外界的實在と認めることである。ヘルバルトの表象機制說は此種に屬する者である。之に反し多くの心理學者の考へる樣に意識の强度といふも一種の性質と考へるならば、そは內界經驗に屬して性質的となり單に記述さるべき事實となると共に、事實を說明すべき原理となるとはできぬ。是に於て我々はディレンマの上に立つ、內界經驗の事實として現れる者は統一の原理となるとはできず、統一の原理となる者は內界經驗の事實として現れるとのできない實在でなければならぬ。此ディレンマを脫するのは意識現象に於ては高次的なる者か實在となるといふことである、統一作用其物が意識の事實となるといふことである。精神現象に於ては統一作用が却つて直接である、これ自然現象と異なる所である。

右の如く考へて見るならば、或人に意識せらるるとは如何なることを意味するであらうか。所謂自己同一の感情といふ如きものは統一作用の符牒であつて、統一作用其物ではない。意識されたる自己同一の感情が統一するのではなくして、此感情

の對象たる自己が統一するのである、此感情はその結果にすぎない。併し意識現象に於ては統一作用の外に統一者があるのではない、働きの外に働くものがあるのではない、働くものなき働きである、働きが働き自身を維持するのである。此の如き實在現象は如何にして可能なるか。此の如き作用と見らるべき現象はその變化の理由を内に有つて居るものでなければならぬ。一つの狀態より他の狀態へ内面的必然によつて移り行くものでなければならぬ。若しその推移に何等かの間隙があるとすれば我々は此現象を統一するのに外界的結合者の力をからねばならぬ、卽ち働きの外に働くものの假定が必要となつて來るのである。右の如く作用が作用自身を維持すると考へられる實在に於ては、その全體の内容が個々の部分に比して、一層實在的と考へられねばならぬ。精神現象は此の如き内面的發展なるが故に、其綜合的全體は要素に對して一層高次的なる實在と考へられるのである、否要素よりも全體が一層實在的と考へられるのである。意識現象は誰かに意識せらて居る、誰かの意識でなければならぬといふのは之に依るのである。ヴントが意識現象を出來事と見做し、意志を以て精神現象の根本的形式と考へるのも、同一の理由によると考へることができる。物體現象に於ては、その統一者は現象の背後に卽ち經驗の外にある

と考へられる、これその間接經驗と考へられる所以である。之に反し、精神現象に於ては、統一作用其物が經驗に現はれるのである、思惟の對象自身が經驗の內に働きつゝあるのである、精神現象に於て對象が內在的と考へられるのは之に依るのである。精神現象は恐らく價値關係といふものを離れて考へることはできぬ、精神現象に於ては規範が直に動因となる、卽ち精神現象を單に自然科學的法則によつて考へるのはその本質を否定するものである。雷に永久眞理の法則が直に充足理由となるもののみならず、作用が作用自身を維持し、外に本體的統一者を要せないのである。例へば數學的證明の過程に於て一つの命題より他の命題に移る時、他を助をかる必要はない、それ自身に於て十分である內面的必然によつて推移するのである。勿論可能的なるものが實在的となるには何物かが加はらねばならぬ、實在的作用の說明には矛盾律の外に充足理由の原理 la principe de la raison suffisante を必要とするのであるが、兎に角精神現象に於ては可能的なるものの中に直に充足理由をふくむと考へられねばならぬ。意識現象は或人に意識されて居らねばならぬといふ「或人」とは此の如き作用の統一者でなければならぬ。我々の眞の自己とは理想と現實との結合點である、ライプニッツのいふ如き永久の眞理と充足原理との結合點である。ライプニッ

ッのモナッドは此の如き意味に於て眞に精神現象の根本的方式である。我々が意識現象を內面的とか直接とか考へるのも此性質によるのであらう、作用其物の中に作用の原因を寓することが此現象をして內面的とか直接とか考へしむる所以である。此の如き內面的推移の少しにても斷絕せる所には、意識は兩斷して二つの意識と考へられるのである。

精神現象は內面的必然によつて推移する作用の現象であるといふには、多くの反對を考へることができるであらう。思惟作用に於ては、或は右の如く考へ得るかも知れぬが、我々の精神現象の推移は必ずしも內面的必然によつてのみ推移する者とは考へられない。我々の精神現象の推移には多くの偶然性があると考へることができる而して此等の現象が或人に意識せらるゝといふことに依つて統一せられて居るのである。我々か或物を見、次に之と全く關係のない他の事を考へた場合にも此等の出來事は「私の意識」といふことに依つて統一せられ居るのである。斯く云ひ得るならば、意識とは意證內容に附加せられる何等かの性質であるとも考へられる。例へば光に照らされることに依つて種々の色が明となる如く、意識は種々の內容を照らす光の如きものと考へられるのである。併し右の如き意味に於て意識せられた者と

然らざる者とを區別するのは如何なる屬性によるであらうか。意識は往々說明のできない單なる感覺の如き者と考へられるかも知らぬが、我々は感覺作用を意識するともできれば思惟作用を意識するともできる、否、感覺も意識であれば思惟も意識で、ある。此等の作用が總て意識であるといふならば意識といふのは此等の現象に共通なる屬性でなければならぬ。而て此等の作用に共通なる屬性はそれぞれの立場に於ての內面的必然の推移といふことである。然に之にも拘はらず此等作用の背後に於ける偶然的統一が一つの意識として考へられるのは意志作用によるのである。意志に於ては互に偶然的なる內容が內面的必然を以て結合せられるのである。意志は偶然的なる者の必然的統一である。此場合にも意識は內面的必然の推移であるといふ考を改める必要はない。我々が互に偶然的と思はれる作用を統一して「私の意識」と考へるのは意志作用の內面的統一に依るのである。一より他に移る時、偶然と考へられるのは立場が異なるが故である。如何にして偶然的なる者が必然的に結合し得るか、偶然的なる者の必然的統一とは矛盾ではなからうかといふ疑問も起るであらうが、意志的統一の必然は道德的當爲の必然である。道德的規範が充足理由の原理として働く所に意識現象の根本的事實がある。他の意識現象も此姿

を映し居る者と考へる事ができる。知識的現象に於ては規範は價値界に屬すると考へられるが、意志現象に於ては規範が卽充足理由の原理である、此事實が我々には意志自由の確信として現れて來るのである、斯く可能より直に現實に移る自由の作用を除去すれば、感覺は物質的性質となり、思惟は單に永久の眞理となるのである。

意識を右の如く解するならば、意識せられなかつたものが或人に意識せられるといふことは如何なることを意味するかを考へて見よう。現今の純論理派の主張に從へば、意味とか存在とかいふものは全然我々の主觀的作用を超越して或主觀が之を意識すると否とは意味自身、存在自身に何等の關係もないと考ねばならぬ。併し一方から考へて見れば、かく客觀的といはれるものも我々の思惟の對象である。無論此等の對象と思惟の作用とは別物であると云ひ得るでもあらうが、此等のものとの對象的關係を離れて思惟作用といふものを考へることができるであらうか。前に云つた如く要素的感覺の單なる連續は思惟作用となることはできぬ、時間空間を超越した意味が統一作用として働くと考へることに依つてのみ思惟作用なるものを理解することができるのである。純客觀的なる意味とか存在とかいふものと思惟作用とは全然離して考へることはできぬ。意識せられなかつた純客觀的の意味

とか實在とかいふものが意識せられるといふことは此等のものが思惟作用として我々の意識内に働くといふことである。主觀的には我々が思惟作用に移り行くことである。感覺的經驗によつて外界を知ると考へるとき、その實は我々は感覺の作用から思惟の作用に移り行くのである。現今の新カント學派の考へる樣に感覺とか事實とかといふことがすでに思惟の加工によると考へねばならぬならば、我々は意識の根柢に感覺以上の或物を認めねばならぬ。心理學者が具體的なる意識現象は單なる知識ではなくして、知情意の三方面を具すると考へねばならぬのも之に依るのである。斯くして我等の意識の眞の起源は所謂自然科學的因果關係よりも一層深き所に求めねばならぬ。意識の起源には所謂物體の世界があるのではなく、意味の世界、可能の世界があるのである。意識現象は意味の因果律によつて起るのである、若し此の如き因果の形式を意志的因果律と云ひ得るならば、意識は意志的因果律によつて起ると云ひ得るでもあらう。意識は感覺の形に於て始まるのではなく、意志の形に於て始まるのである。意識の起源には可能より現實への直接の推移がなければならぬ。ライプニッツの神に於ての樣に可能的なるものが直に實在的でなければならぬ。充足理由の原理は之を現はすものと考へることもできる。此の如

き考を認むるには種々の困難もあるであらうが、我々が赤の感覺を意識するには色の世界がなければならぬ。色の理念が働かねばならぬ。色の感覺の背後にはエーテルの波動の世界があるのではなく、色の本質の世界があるのである。所謂自然科學的存在の世界は意識の世界に比して第二次的である、我々が存在の世界を知るといふことと意味の世界を知るといふこととはその意義を異にして居なければならぬ。後者は意識の根柢となり前者は却つて其上に建てらるのである。意識の眞の起源右の如きものとして、意識せられなかつたものが意識せられるとは何を意味するか意識作用と意識對象との間に如何なる關係があるか。現今の純論理派の言の如くすれば、對象と作用との結ひ付き樣はないのであるが、此の如き分析の前に綜合がなければならぬ。意識の直接の背後は無限なる可能の世界である、ライプニッツの極微知覺 petites perceptions も此の如き可能の世界を意味して居らねばならぬ。可能と實在とを分つは意識せられた世界に於てである、意識の實在界に於ては可能は直に實在でなければならぬ。我々の意識は意志として無限なる可能の世界に連なつて居る、モナッドが極微知覺に於て宇宙を知るといふ如くに、我々は意志に於てすべての可能界を知るといふこともできる。意志は意識の具體的基礎である、意識は意志

の基礎に於てのみ可能である。此故に意志は意識の極限點である。意志に於て主客合一し意識は眞實在たる物自體に接觸するのである。例へば我々が一直線を意識するとせよ、極限點とは我々の分析によつて達することのできない超感覺的なる思惟對象である、而も我々が一直線とか運動とかいふものを意識するのである。此場合、一々の點が極限點として意識せられねばならぬ、一々の點に於て理想と現實とが相接觸して居らねばならぬ、一々の點の意識は意志でなければならぬ。勿論純論理派の考の樣に連續といふ如きものは純なる思惟對象としてそれ自身に獨立し、思惟作用として意識せられると否とは對象自身に何等の關係もないと考へることもできる。永久眞理の中には充足原理を含んで居らぬ、永久の眞理が實在的となるにはライプニッツが "De rerum originatione radicali" に於て云つて居る樣に inclining reason が加つて來なければならぬ (rationes non necessitant, sed inclinant. Gerh. VII. 302.)。永久の眞理と永久の眞理との結合は余の考では知識のアプリオリとアプリオリとの結合であつて、そこに限定があり、實在がある、實在は此意味に於て Compossible である。純論理派の如き考へ方では、此の如き結合にはライプニッツの充足理由の原理の如きものが外から加つて來なければならぬと考へるのであるが、ライプニッツが "Monadologie. 44."

に於て云つて居る樣に、永久の眞理の中に於て何等かの實在性があるならば或存在(quelque chose d' Existant etd' Actuel)に於てその基礎を有せねばならぬ。固より之を自然科學的存在の意味に解するならば大なる誤謬に陷るのであるが、或一つの眞理が眞理として己自身を維持するには、或一種の力を有たねばならぬ、而して斯く一つの眞理が他に對して己自身を維持するには卽ち一種の實在性を有するといふには之を他と關係せしめるものがなければならぬ。我々は眞理の力を認めると共に眞理の體系を維持する一種の主體 subjectum を認めねばならぬ。或一つの命題が眞理として立せられるには、すべての命題の主語として如何なる意味に於ても客語とならない主體がなければならぬ。此意味に於て眞理はそれ自身に於て立つ生きた一つの個體である。すべての命題の眞の主語を "Reality" と考へねばならぬといふのも之に依るのである(Bosanquet)。ライプニッツにては永久眞理の原理と充足理由の原理との內面的關係が明でないが、種々なる眞理のアプリオリを結合するものは意志のアプリオリである、換言すれば種々なる作用を結合するものは意志の作用である。意志のアプリオリの上に於て他のアプリオリは成立つ、永久眞理に實在性を與ふるものは充足理由の原理である。compossible は單に possible の無限なる和ではなくし

て、可能をして可能たらしめる基礎でなければならぬ。ライプニッツがスピノーザに逢つた時、「完全なるは存在す」Quod ens perfectissimum existit を論じて無限なる性質は一主體に結合することができる、何となれば二つのものが incompatible といふには二つのものを分けて見なければならぬ、然るに此の如き性質は分つことができぬと云つたといふが此の如き主體は絶對無限の意志でなければならぬ。

以上論じた如く意識作用とは意味から意味への內面的推移である、意味の內面的推移といふのは意味其物が、一つの力として他の意味を引き起すのである。意味はすべて實現せらるべき傾向を有つて居る、卽ち意識せらるべき傾向を有つて居る、之なければ意味は意味自身を保つことはできない。此の如き傾向が我々の所謂精神作用といはれるものである。併し意味が他の意味を引き起すといふこと卽ち意味の內面的推移といふことは無限なる意味が一つの主體に統一されて居ることを意味せねばならぬ。限定されたる或一つの意味から他の意味が出て來るとはできない、或一つの意味が限定されるにはその背後に他の限定の可能を含んで居る、卽ち一層具體的なる基礎に於て限定せられるのである、$\alpha\alpha+b\beta\alpha$ の上に於て限定せられるのである。此の如き可能界の主體の上に立つといふことが意味自身が力を有する

ことであつて、內面的推移といふのは此の如き基礎に於て、含蓄的であつたものが顯現的となるのである。意味は此の如くして內面的に推移するのである、これが意味の働く方式である。意識現象に於ては統一作用が實在的であるといふのは之に依るのである。意識せられたものと意識せられないものとの區別は actual と possible との區別となる、而して現實は compossible である。我々は極微知覺に於てはすべてを意識するといふこともできる。我々が一つの直線を意識した時、極微知覺に於て無限なる分析の可能を含んで居るを考へることができる。我々の現實の自我は何時でも可能界の主體たる先驗的自我に連なつて居るのである。所謂意識の閾の如き考によつて無意識から區別せられる意識は考へられた意識である、具體的意識はライプニッツが現在が過去を負ひ未來を孕むといふ樣に (en conséquence de ces petites perceptions le présent est gros de l'avenir et chargé du passé, que tout est conspirant) 無意識の部分を含んで居なければならぬ。意識の中に無意識を含むのが內面的推移である、我々が意識と無意識とを區別するのは此兩者を含んだものに依ると考へねばならぬ。併し possible と compossible とは單なる程度の差ではない、後者は前者の單なる總和ではない、之には inclining reason が加はらねばならぬ。單に思惟對象たる意味と作用として

働きつゝある意味とは區別せなければならぬ、現に動きつゝある意味と然らざるものとを區別せなければならぬ。意識現象に於て直覺が根本的と考へられるのは之に依るのである。多くの心理學者が感覺を意識の根本作用と考へるのも此故である。思惟にてもその全體が先づ直覺的に現れ來るのである。此の如き直覺は內面的推移の根柢たる具體的全體卽ち $\delta\nu + \mu\eta\ \delta\nu$ を表はすものである、意味が意志の支配の下に來ることを示すものである、永久の眞理と充足理由の原理との結合を示すものである。意志作用の原理たる充足理由の原理が意識の根本的原理である、之に依つて有限の中に無限を含み、意識の中に無意識を藏し、作用から作用に移ることができるのである。

余が今一種の色を經驗する、否そこに一種の色の經驗がある、之を「私の經驗」であると考へる時、此經驗は主觀的と考へられざるを得ない。併しこゝに一種の色の經驗が現存するといふことは單に主觀の力によるのではない、我々は又是に於て外界に光線なる者を想像せざるを得ない。加之、色を單に主觀的と見るも其性質は多くの主觀に共通の者と考へられねばならぬ、卽フッサールの本質 Wesen といふ如き者が考へられねばならない。色の經驗は主觀的といふも、色の經驗の存在及變化に對して所

謂自己は何等の力を有するのではない。經驗それ自身が一種の客觀性を有つて居る、物理的現象といふも此變化を離れてない。我々は此等の經驗の變化を時間、空間、因果の範疇に當嵌めて自然界を構成するのである。眞に與へられたる直接の經驗其物は意味其物の內面的發展である、容觀の中に主觀を含み主觀の中に客觀を含む事行 Tathandlung である。此意味に於て精神現象は物理現象に比して一層直接であり具體的であると云へる。物理界といふのも主觀を離れた者ではなく、カントの所謂先驗的自我の統一によつて成る一つの意識對象界と考ることもできるが。所謂自然界といふのは一般的ではあるが抽象的なる認識主觀の統一によつて成立せる者であつて、意識現象といふのは此立場から翻つて具體的なる直接の經驗を見た者である。或一つのアプリオリの上に立つ對象界から、翻つてアプリオリを對象とする意志の世界を見た者である、或一種の價値の上に立つ客觀界から翻つて價値卽實在の世界、意味卽事實の世界を見た者である。此處には目的論的原因と道德的必然とが支配するのである。此の如き方向を追ふて自然界から具體的體驗の世界に至る順序は、物力の世界から生命の世界に至り、生物の世界から意識の世界に至り、意識の世界から歷史の世界に至り更に時空を超越して絕對意志の對象界に入るのである。

心理學者の所謂意識界とは絶對意志の對象界と自然科學的世界との接觸點である。純粹直觀の世界は全然客觀的でもなければ全然主觀的でもない、卽ち全然物體界でもなければ全然精神界でもない、それ自身に動的なる具體的經驗は自ら主觀客觀の兩面を備へて居る。我々は經驗內容に就て區別することができるだけ、それだけ種々の對象界を有すると共に、種々の精神作用を有つて居る。思惟內容と感覺內容とを分つことに依つて、一方に命題自體と表象自體との對象界ができるとともに、一方に思惟とか感覺とかいふ作用が考へられねばならぬ。作用といふのは種々なる經驗內容をその結合點から見たものである。かく種々のアプリオリの上に立つ經驗を作用として、此等の作用を結合する一層根本的なる經驗も亦一つの具體的經驗として主觀客觀の兩方面を有ち、その對象界は二重となり、直接には意識界卽ち人格的歷史の世界となり、間接には自然界となるのであつて、自由の意志がその主觀的作用となるのである。何となれば意識界は旣に作用の結合として自然界に對しては主觀的であるが、更に絶對自由の意志の立場から見れば客觀的である、絶對自由の意志は人格と人格との結合點である。此の如き絶對自由の意志の對象界が我々の所謂直接の實在界である、これがライプニッツのモナッドの世界とも云ふべきであらう、意

志の立場から見て、所謂作用の結合に無限の結合の仕方がある、これが卽ち無限のモナッドの存する所以である。此の如き作用の結合の仕方の無限なるが如くそこに無限のモナッドがある。ライブニッツに從へばモナッドは皆同一の世界であつてその見方(differens points de veue)によつて互に異なるといふ(Monadologie. 57.)。例へば一つの圓の射影が無限なる圓錐曲線の變化を起す如き者であるといふ(Théodicée. 357.)。作用の種類は同一としても之を結合する仕方に無限あると考へることができる、卽ち意志は自由である。無限なる意志の type は無限なるモナッドの見方として、之によつて無限のモナット無限の實在界が成立つのである。(ライブニッツのモナットは余の所謂意志の對象界の實在である、余は斯く考へることに依つて、タルドの "Monadologie et Sociologie" に於る toute chose est une société, toute phénomène est un fait social といふ考に興味を有するのである)。我々が或物を意志するといふのは一つのアプリオリの上に於てするのである、卽ち一つの作用に於てするのであるが、作用の束たる一人格の意志としては、他の無限なるアプリオリ、或は作用との關係に於て立つ、卽ち極微知覺として他の無限のアプリオリ、或は作用と關係するのである。

以上論じた如き譯であるから物體現象の特徵を延長とすれば卽ち所謂空間的で

あるとすれば之に對して精神現象の特徴を意味卽作用たる自足的發展と考へることができるのであらう。物體現象の空間的といふに對して精神現象は單に時間的と云はれるのであるが、時間といふも單に無意義の連續といふ如き形式はベルグソンの所謂同質的時 le temps homogène であつて、之を以て精神現象を物體現象から區別することはできぬ。眞に具體的なる時間は自足的發展でなければならぬ。種々なる經驗の變化及び相互の關係を物理的に解釋するのは言ふまでもなく、マイノングの對象論 Gegenstandtheorie の如きものも單に對象間の客觀的關係と見られるであらう、意識現象は此等の經驗內容の共立關係 compossible relation でなければならぬ。此意味に於て意識現象は實在的であり、心理學は實在の學である。而して此の如き共立關係を現すものは意識の統一 unity of consciousness である。意識現象は意識の統一に於て成立つ、少くとも統一の可能的傾向を有して居らねばならぬ。或經驗が意識現象と見做されるのは此傾向を有することに依るのである。純なる一つのアプリオリの上に立つものは單なる對象界である、他の意味との結合に於て意識現象となるのである。(心理學者が意識は誰かの意識でなければならぬとか意識に於ては對象が內在的であるといふのは之を意味するのである)。心理的法則といふのは右の

如き約束の下に於ける意味の關係の法則でなければならぬ。此の如き意識統一は全然身體といふ物體的條件の下に立つといふのが普通の考へ方であるが、我々は爾獨斷的に考へることのできないのみならず、意識の方が却つて一層根本的なる實在と考へることもできるのである。無論右の如き統一點は恰も極限點の如く到達することのできない點であらうが、之なくして意識の成立できない sine qua non といふべきものである。向に云つた如く意識の根本的形式が意志と考へられ又直覺的と考へられるは之に依るのである。

余は純粹心理學ともいふべきものは右に述べた如き立場の上に立つものではないかと思ふ。此點に於て心理學は自然科學とその立場を異にして居ると云ひ得る。無論此の如きことは心理學者は疾くに之を知ると云ふでもあらうが、今日の心理學はその說明に於て十分その立場を明にして居らぬではなからうか。例へば聯想と統覺との區別を統一的表象の明瞭不明瞭として考へる如きも、嚴密に考へれば精神現象を外から見たものであつて、眞に意識現象としての內面的區別が考へられて居らぬと思ふ。精神作用の區別の如き却つてブレンターノやマイノングなどの考へ方が純心理的といふべきではなからうか。情緒の說明の如きを所謂實驗的研究と

いはれるものよりもスピノーザのエチカに於ける情緒の說明の如きものが却つて眞に意識としての情緒の本質に觸れて居るのではなからうか。徒らに經驗といひ、事實といふも、すべての實在の經驗とか事實とかいふことが同一意義に於て論じ得るか否やは深く考へて見なければならぬと思ふ。併し余は決して現今の實驗心理學の價値に就て異議を挾むのではない、唯、現今の實驗心理學を以て唯一の心理學となすことに對して尙多くの疑を存し、且つ心理學に於ける立場の混淆といふ如きことに就て嚴密なる批評を要すると思ふのである。